

第8回遺伝子組換え農作物等の研究開発の進め方に関する検討会 (議事概要)

- 1 日時：平成19年12月 3日(月) 14:00~16:00
- 2 場所：農林水産技術会議委員室
- 3 出席者：別紙参照
- 4 議事概要：

事務局から配布資料「中間取りまとめ以降に寄せられた意見等に対する対処方針(案)」「コミュニケーション活動における主要意見の概要(補足)」、「遺伝子組換え農作物等の研究開発「工程表」(案)」等の説明が行われました。出席者からの主な発言は以下のとおりでした。

(1) 実用化に向けた道筋の検討について

- ・「遺伝子組換え」という名称を変更するかどうかは、コミュニケーションの場や学会を含めたオールジャパン等関係者全体で慎重に取り組む必要がある。
- ・開発された遺伝子組換え農作物を普及させていく上では、都道府県の役割が重要であることから、都道府県との連携を明記する必要があるのではないかと。
- ・遺伝子組換え作物の実用化を進めて行く上で、特許の許諾等知的財産に関する記述を充実させる必要があるのではないかと。
- ・工程管理を「厳格」に行うのか、「柔軟」に行うのか議論しておく必要があるのではないかと。
- ・「安全性の一層の確保に向けた取組」と聞くと、安全性の確保が未だ不十分ではないかと受け取る人もいる。「安全」と「安心」は書き分けることが必要。
- ・遺伝子組換え農作物の実用化・普及に関しては、販売戦略や訴訟対策等を含めた企業経営学的観点からの検討も必要となることから、社会科学の研究分野との連携も書き込む必要があると考える。
- ・ヨーロッパの共存(有機栽培、慣行栽培、GM栽培)に関する考え方は評価できる。日本でも研究開発の場だけで議論を進めるのではなく、出口を見据えて議論する必要がある。

(2) 重点研究開発分野の工程表案について

- ・重点課題として取り上げ内容がイネに偏重しているのではないかと。また、例示的に代表課題として取り上げたものとは言え、特定されすぎていないか。バイオマス用ではサトウキビやテンサイも有望作物として考えられるのではないかと。

- アジアでの普及を念頭に置いてイネに特化するとの考え方はあり得るのではないか。戦略にどこまで書き込むかという議論はあるが、海外の主力産品であるダイズ、トウモロコシをどうするかという考え方もある。
- 飼料用多収イネについて、ケイ酸を多く含有するイネは飼料用には使えないため、実とり用とサイレージ用では、育種の戦略は全く異なる。どちらを目指すにせよ、よく検討すべき。
- カドミウムのバイオレメディエーション利用にイネを想定した場合、イネはppm単位でしかカドミウムを吸収しない。最終的にどう処理するかという対策まで考える必要があるのではないか。またこのイネを食料に利用すると誤解されないようにする必要。
- 安全性のチェック内容についても、工程表内のそれぞれの分野毎に明示する必要があるのではないか。

(別紙) 委員の構成

(五十音順、敬称略)

有田 芳子 主婦連合会環境部長

石井 茂孝 キッコーマン株式会社顧問
(財)野田産業科学研究所副理事長兼専務理事

内宮 博文 東京大学分子細胞生物学研究所教授
(財)岩手生物工学研究センター所長

貝沼 圭二 農林水産技術会議委員
元 国際農業研究協議グループ(CGIAR)科学理事会理事

小池 一平 全国農業協同組合連合会営農総合対策部長

篠崎 一雄 (独)理化学研究所植物科学研究センター長

武田 和義 岡山大学資源生物科学研究所所長
日本学術会議会員

田畑 哲之 (財)かずさDNA研究所副所長

廣塚 元彦 不二製油株式会社研究開発本部フードサイエンス研究所所長

三石 誠司 宮城大学食産業学部教授

山本 和子 フリージャーナリスト
(有)農業マーケティング研究所所長